

## シャマニズム的呪術治療と信仰の力

— シャマニズム的「薬」の民俗を中心に —

張 高 娃

ZHANG Gaowa

非文字資料研究センター 2021年度奨励研究採択者  
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 シャマニズム的治療は宗教実践と人々の文化的解釈という、二つの核心領域に関わるものである。シャマニズム的宗教信仰は主に呪術儀礼と治療行為を通して表現する。ホルチン・シャマニズムの考えでは、疾病は実病（自然的、科学的病気）と「シェルタガン・タイ・エベチン（siltagan・tai・ebeqin）」とに分けられる。「シェルタガン・タイ・エベチン」を直訳すれば、「原因がある病気」である。ブォ（シャマン）的意味は医療的に原因不明となる病気、いわば超自然的要素、先祖の罰、タブー、巫病、悪霊にたたられる……などである。筆者はフィールドワークを行った際、「どのような病気を治療できますか」とホルチン地域のXJDブォ（シャマンの名前をアルファベット+ブォと書く）に尋ねたところ、「人間には404種類の病気があって、その中で101種類の病気を「医者（otati・burhan）」が治療し、101種類の病気をラマ僧が治療し、101種類の病気が自己治療し、残りの101種類の病気をブォが治療する。それは「シェルタガン・タイ・エベチン」のことだ」と答えが返ってきた。

ホルチン・モンゴル人の霊魂崇拝から見ると、霊魂は不滅で、死後も引き続き活動すると信じられている。バンザロフは、「蒙古人は時を経るに従って死者の霊は生者に害或いは益をなすものと信ずるに至り、遂に彼等は死者を以て一種の神の中に加へ、これをオンゴンと名付けたのである。また、オンゴドを善悪の両義性を帯びた存在と捉え、悪人の死霊（悪霊）は、地表上に彷徨し、人に災いを与える場合、悪なるオンゴドにあるが、この場合、オンゴドと言わず、アダ（悪霊）と称している」[バンザロフ・ミハイロフスキー 1971: 41-42]と指摘し、一般の民衆の中でほとんどの邪病はアダが害を加えたものだとしている。このような病因観のもとで、呪術儀礼と治療行為を通して、民間信仰医療が実践されている。それはサイグ（呪薬）が患者の心身に取り憑いた悪霊を調伏し、病気や災難から守る護身符の役割を果たす文化的象徴になっており、また、薬草（生薬）などを入れた「サイグ・イン・フルグ」（補助薬）はある程度実際的な医療効果を果たしていると考えられる。

そして、本論文では、文献資料と2021年の11月から2022年2月にかけて行ったフィールドワークを取り合わせて、ブォの治療法に関して考察を行い、①「オンゴドのザサルガ」（霊的な力の由来）、②「エベスン・エム・ネ・ザサルガ」（ブォが薬草「生薬」を利用して“薬”を作り、患者の病気を治療すること）、③「アルシャーン・オガールガ」（出産、母子保健に関する専門治療と心身を清める「薬浴」という三つの事例から分析した。また、「グリム・ザサルガ」は、人間（患者）の身代わりを捨てる、あるいは燃やすなどの行為によって悪霊祓い儀礼を行う呪術治療である。

Shamanic Magical Therapies and the Power of Faith  
— Focusing on the Folk Traditions of Shamanic Medicine —

**Abstract :** There are two core aspects to shamanic therapies: religious practices and cultural interpretation. Shamanic religious practices mainly involve magical rituals and medical treatment. In Khorchin shamanism, the concept of illness is divided into (a) standard illnesses (natural, scientifically diagnosed diseases) and (b) *siltagan tai ebeqin*, directly translated as “illnesses with a cause.” The latter are conditions that mainstream medicine fails to diagnose and considered by boos, or shamans, as ailments associated with supernatural etiology, including ancestral punishment, breaching taboos, shamanic initiation, evil spirits, and others.

During my fieldwork I inquired with the Khorchin shaman XJD boo (a shaman’s name is written with alphabet letters followed by boo) about the kinds of diseases he was capable of healing, and he replied: “There are 404 kinds of diseases humans are susceptible to. Of those, 101 are treatable by doctors, or *otati burhan*, and another 101 by lama priests; one hundred and one illnesses heal naturally. Boos treat the remaining 101 conditions, and these are called *siltagan tai ebeqin*.”

Spiritual worship of Khorchin Mongolians is characterized by the belief that a person’s soul is immortal and continues to be active even after death. The scholar Dordzhi Banzarov wrote: “Mongolians came to believe that the soul of the dead over time becomes either harmful or beneficial to the living. Eventually they began to consider these souls as a type of God, naming them ongron. The souls thought to have both good and evil qualities are called ongrod. The souls of evil dead people, or bad ongrod, that roam the land causing harm to people are called ada, or evil spirits, rather than ongrod” (Banzarov, mikhaylovsky 1971 : 41-42). According to Banzarov, most diseases are caused by these evil spirits.

The practice of folk medicine consisting of magical rituals and therapies is guided by the medical philosophy described above. In this philosophy, the shamanic drug Sayig exorcises evil spirits that take possession of a patient’s mind and body. The drug is also a cultural symbol, serving as an amulet that protects people from sickness and misfortune. Sayig in hulug, or adjunctive agents, containing natural herbs are believed to be medically efficacious to a certain extent.

Through a literature review and fieldwork conducted between November 2021 and February 2022, this paper analyzes the healing practices of boos with a focus on three topics: (a) Ongyod’s zasalga (the origin of spiritual power), (b) Ebesen emen zasalga (therapy using herbal medicines prepared by boos, and (c) Rasiyan ogiyalg (specialized perinatal and mother-and-child healthcare and medicated baths to cleanse the body and mind). In addition, the paper discusses the shamanic therapy of grim zasalga that involves the exorcism ritual of disposing of or burning the surrogates of the patient being treated.

## はじめに

シャマニズムの治療行為から見ると、シャマンが治療経験を経て、一定の医療知識を身につけて行われる疾病に対する治療は象徴的なパフォーマンスを通して、呪術的な儀礼で、患者を苦しめているアダを追い払うことで、ブォの治療効果に信頼感を高めることである。内モンゴル・ホルチンの場合、治療者に対する依頼者の信頼感を高めるための媒介者として、呪文を込めたサイグ（呪薬）が存在することにより、治療者ブォの超自然的な力を患者へ伝達し、体にとり憑いた悪いもの（悪霊や怨霊）を祓う悪霊祓いがなされている。シャマンが治療を行うときによく使う「処方」であり、その服用法は、サイグを燃やした灰に生薬、お酒や牛乳、砂糖などを em・in・hulug「補助薬」として加えて飲むというものである。そうすると、患者の心身に取り憑いた悪魔が調伏され、病気や災難から依頼者を守ってくれると信じられている。とはいえ、呪術的な治療と医療治療を取り合わせて治療を行うのは、シャマニズム治療法の特徴になっている。本研究の対象地域は中国内モンゴル東部ホルチン地域である。ホルチン地域のモンゴル人社会が生業の転換や漢人移住により、遊牧地から半牧半農へ変化し、さらに文化の相違から異文化衝突が起こり、それら文化を形成される内的な社会問題を起こしている。その一方、文化変容に伴って、さらに現在漢人化しつつあることと、言語や文化の消滅問題に直面している。そのため、当該地域のモンゴル人は物質世界ないし精神世界に不安定さを生じていることが、シャマニズムやシャマニズム的治療の復活と関係しているのではないかと考えるからである。しかし、本論では、シャマニズム的病因論には焦点をあてず、主にシャマニズム的、呪術的な治療とシャマニズム的な薬に注目しながらまとめていきたい。本研究では、歴史文献と2021年の11月から2022年2月にかけて行ったフィールドワークをもとに、シャマンのこういった行為の背後にある伝統的医療の存在やシャマニズム的信仰と在来の知性について考察したい。

さらに、治療法に着目しホルチン・シャマニズムの病因論、霊魂崇拜についてはまとめられているものの、シャマニズム的「薬」の民俗に関する研究はほとんど行われていない、筆者は、地域社会において、民間信仰医療者として活動してきたシャマニズム的知性とその背景にある世界観を明らかにすることが重要であると考えた。本論文では、地域社会生活の視点から、シャマンはどのような役を演じているのか、文化的にどのような役割を果たしているかを明らかにしたい。

## I シャマニズムにおける信仰治療の概説

### (1) 先行研究

シベリア諸民族の原始的な霊魂崇拜に根ざした世界像は、一般にシャマニズムと呼ばれているとハルヴァは指摘している [ハルヴァ 1971: 405]。本論で論じるオンゴド信仰は言うまでもなく、モンゴル人の霊魂崇拜を示している。

また、佐々木宏幹はシャマニズムは言うまでもなくシャマンという呪術一宗教的職能者を中心とする宗教形態であると指摘している [佐々木 1984: 70]。以上のように、その宗教的職能者であるシャマンおよびシャマニズムは学術用語として定着し、世界中の神秘的呪術や宗教的職能者の代名詞になっている。そして、シャマニズム研究の古典的なものとしてバンザロフ [バンザロフ・ウエー・エ

ム・ミハイロフスキー 1971] が挙げられる。エリアーデ [1974] の研究はシャマンの機能的定義から世界各地のシャマニズム的現状を分類したもので、今なお有用である。

近年の研究動向として、シャマニズムと地域社会間の相互作用、シャマニズムとエスニシティ・アイデンティティ問題、およびシャマンの身体論に関する研究が展開されている。例えば、モンゴル国において、シャマニズムと地域社会およびエスニシティ・アイデンティティ間の相互作用に関する研究として、島村 [2000] が挙げられる。また小長谷有紀は、現代におけるチンギス・ハーン崇拜の分析を通して個人ないし国家レベルのナショナリズムの台頭の根源となって、帰属意識の内実が何らかの外因で傷つく、あるいは喪失する不安と不確実さによる苦痛に対処して、儀礼をもって、その「アイデンティティの危機管理」[小長谷 2013] をしようと試みていると指摘している。内モンゴル自治区ホルチン・シャマニズムの研究では、モンゴル地域のシャマニズムと民俗医療の相互作用を医療人類学的諸視点から考察した [サイジラホ 2015: 15]。また、『ブォ・シャマニズムの現在』では、シャマニズムの復活、成巫過程について興味深い豊富な内容の事例考察を行っている。シャマンが病氣治療、憑き物祓い、テングリの祭祀、占い、仏教とシャマニズムの習合の現状、服装および道具の変容などによって、シャマニズムは近代化されつつあるホルチン地域で復活していると述べている [サラゴワ 2019]。こうした多岐にわたるアプローチの中で、シャマニズム的な背景で、「もの」をめぐる民俗についての研究は管見によれば見られない。

その一方、佐々木はシャマンの役割は、儀礼（セアンス）を通じて果たされることは言うまでもないという。シャマンが行う儀礼の種類は民族や地域により異なるが、その特質や性格は民族・地域の範囲を超えて著しい共通性を示すと見られる。すなわちセアンスにおいて人々が、神や精霊に変身した威力ある存在（シャマン）に直接接触し、言葉を交わし、その聖なる手でわが身に触れてもらい、手ずから作り上げた聖物（神符・神水・神薬など）を直接受け取ることでできる（憑霊型）。また人々は天上界や地下界の霊的存在を訪れたシャマンから、聖なる意志や指示を直接耳にすることができる（脱魂型）と指摘している [佐々木 1984: 26]。前述の内容で、聖なる力（霊力）は、儀礼を通じて機能しているといえよう。さらに、その聖なる手と聖物（神符・神水・神薬など）を与え、霊力を具体化することにより治療効果を果たしていると理解してもよいだろう。

そのため、筆者はシャマニズムにおける信仰治療について、シャマニズム的な「薬」、すなわち呪文、呪薬（生薬）、呪術儀礼などの「もの」をめぐる現地調査を通じて、考察を試みたい。

## (2) シャマニズムにおける信仰治療

リヴァーズ (W. H. R. Rivers) は人類の世界観を魔術的、宗教的、そして自然的の三つに分類した。そしてそのような世界観に従って、その社会的過程を基にさまざまな病因論と疾病観が生み出されるとともに、宗教性の強さが病氣対処に直接的に影響することで、ある特定の環境下で罹患した病氣に合わせた特殊な医療行為が行われると主張した [リヴァーズ 1999]。

具体的に言えば宗教性の高いポリネシアでは、病氣は神々やほかの霊的な存在に起因するものとされ、治療もほぼそれらの超自然的な存在の力によって行われる。一方メラネシアでは、病因は直接、人間や人間によって導かれたりコントロールされたりする霊的な存在のエージェンシーに帰属させるため、病氣の治療にあたっては、霊的存在のエージェンシーに対する知識と能力を有する人間が介入

するという。例えば、人間の魂が体から離れたり、あるいは呪術者が何らかの形で被害者に呪いをかけたりすると、その人に病気が訪れる。あるいは、大自然の万物、例えば石、草、動物が霊的存在であり、その霊が人間に憑くことで病気をもたらすと指摘する。つまりリヴェーズは、メラネシアとポリネシアの原住民はその病気をもたらした原因を診断した上、その病気の特徴に合わせて、シャマニズム的にその病気をもたらしたと見られるものを被害者から取り除く治療を行っていると主張する〔リヴェーズ 1924：7〕。

次に、〔レヴィ＝ストロース 1972 (1958)〕は南アメリカや北アメリカの伝統的な社会における医療、呪術、宗教の相互関係に人類学的視点から調査を行い、その社会のシャマニズムの治療に関心を寄せて治療の心理的象徴的効果論に注目した。彼は呪術者による病気治療時の演劇性をめぐり、癒しのプロセスに注目することで、呪術への信仰、治療者、患者の三つの要素からなる治療効果の役割関係を見いだした。言い換えれば、呪術への信仰を前提とする伝統的な社会においてシャマニズムの治療が成立するためには、次のように社会的合意が必要とされる。

まずは、治療者による自分自身の施術の効験に対する信仰である。そして病気の診断（病因を探し出す）から治療にいたる諸過程の意味に秩序をつける解釈体系がある。その中でシャマンは治療者としての役割を演じ、心理的にも肉体的にも特殊な諸状態を経験する。次に、彼が施術する患者は治療者の能力に対して信仰を抱いており、癒しに向かうことを信じている。最後に、集団的な世論の信頼と要求があり、公衆も治療に参加する。シャマンに対する集団的帰依やニーズはシャマンが治療に向き合う信条を確立させるものとなる。つまり、象徴的治療効果には、シャマニズム的信仰に基づくシャマンの内的経験と集団的合意が不可欠な条件となっていて、このことが3者の社会的合意に基づく治療過程を構成している、と指摘する。

レヴィ＝ストロースはこうしたシャマニズム的信仰に基づく社会的合意を背景に成り立った「治療者—患者関係」と、そのことがもたらす治療効果をいわゆる「象徴効果論」として論じている。つまり、治療のときにうたうシャマンの詩的呪文や唱文、それに伴う治療の過程を通じて具体化される感情的言葉と象徴的行為が、心身異常の秩序回復をもたらしているのだと。すなわち彼の言葉で言うならば、その「神話」を患者が受け入れることによって、精神的ないし肉体的な病気が治るという象徴的治療効果にたどり着くのである。この意味では、治療儀礼のときにうたうシャマンの詩的呪文や唱文は、病める器官に対して施される心理的触診であり、そして確かに、この触診によって病気は治癒するのである〔レヴィ＝ストロース 1972 (1958)：183-227〕。そのほか、佐々木もシャマンの巫病治療（トランス）について、神や精霊に変身した威力（霊力）あるシャマンが、自ら病人を治療したことの心理的意味は大きい。“神の直接的加勢”が、人々の治癒への意味に拍車をかけるからである〔佐々木 1984：27〕と指摘する。

以上のように、シャマニズム的信仰のもとで、治療儀礼に表象される叙述やパフォーマンスが象徴的意味の秩序作りに対して役割を果たすこと、またそれによって精神的ないし身体的痛みが治るのだという議論が考察されてきた。

シャマニズム的な信仰治療を見る前に、地域社会における医療の多元論を考察する必要があると考える。伝統社会においては、外来勢力や異文化との衝突によって固有の文化は多様化する。日本では近代医療、土着化した中国起源の伝統である漢方医療、そして、祈願や呪術などの民俗医療などが存

在し、人々は各自の意志によってそれらを利用している [波平 1988]。内モンゴルにおいてはこれらの医療現象よりさらに複雑な様態が見られる。例えば、モンゴル人居住地域には近代医学の土着化、中国伝統医学の浸透、モンゴル伝統医学の近代化および祈願、呪術、シャマニズム的治療などの現象が併存している。その上、多元的医療体系とは、一つの社会に複数の医療体系とそれを支える信条が多層的、多層的に存在し、またその状態を説明するための分析モデルが共存していることである。

そこで、近代化に伴って伝統的な社会へ進出した近代の制度的医療の普及に従って変容しつつある医療体系の内部構造を視野に入れたクラインマン (A. Kleinman) の『臨床人類学』に注目していきたい。この著作は、医療人類学、通文化 (cross-cultural)、心理学、超文化 (trance-cultural)、精神医学の視点から見たヘルス・ケア体系の国際的・社会的側面、あるいは地域研究や衛生と近代化の関係を扱った研究などの諸分野を研究の射程に収めている。すなわち、彼は文化体系としての医療の内部構造を構成する要素を民間セクター (popular sector)、民俗セクター (folk sector)、と専門職セクター (professional sector) という三つの次元の要素で構成されている、と指摘し、具体的に以下のように解釈した。まず、ヘルス・ケアの民間セクターとはヘルス・ケアの民間領域を指し、個人、家族、社会的ネットワーク、地域社会の信念と活動を含む一つのマトリックスである。またそれは職業ではなく、専門家が動くのでもない、一般庶民の民間文化の場である。これは各セクターの境界の接合点となり、各セクターの出入り口との相互作用点であり、患者を家庭的に治療しケアする場である。

次に、ヘルス・ケアの専門職セクターは治療の専門家により構成され、現代の科学的医療が行われる場である。

最後は、クラインマンの言葉を使えば「非専門職的、非官僚的な専門家によって構成されたヘルス・ケアの民俗セクター」である。これは、シャマニズムに代表される「宗教的な治療」と、薬草や伝統的な民間療法、治療儀礼などの「世俗的な治療」に分けられるが、宗教的部分と世俗的部分とは二つは重なっている部分が多いと分析する [クラインマン 2021: 56-68]。以上のように、リヴァーズは、伝統的な社会の人々は霊的な世界の枠組みの中で病気や不幸の原因を解釈し、またそれに合わせた治療方法を持っていると指摘する。また、レヴィ＝ストロースの呪術的治療の象徴的効果論、クラインマンの病いの説明モデルおよび病いの語り分析、ヘルス・ケア体系を考察してみた。

一つの社会におけるヘルス・ケア体系は多元的であるため、確かにクラインマンの指摘した内部構造の解釈モデルは、内モンゴルのヘルス・ケア体系の内部構造を理解するのに役立つと思われる。内モンゴルでは、政府の認可を受けた西洋医学、中国伝統医学、モンゴル伝統医学の医師が病気治療に当たっているほかに、政府非公認のシャマニズム的 (呪術、信仰) 治療も地域社会の合意を得て、治療者が活躍しているのである。

本研究では、民俗セクターに分類されているシャマニズム的信仰治療に注目し、シャマニズムに代表される「宗教的な治療」と、呪薬 (呪文、薬草) や伝統的な民間療法、呪術儀礼などの「世俗的な治療」を記録しながら、シャマニズム的「薬」をめぐる民俗を考察したい。

## II シャマニズム的薬の分類とその機能性

信仰治療における「薬」とは、シャマニズム信仰の世界観を背景として、シャマンの霊力を機能させるものである。本論では、ブォの病気治療で薬として与えるサイグ（呪薬）に呪文の力やブォの守護霊の力が凝縮されている「サイグ・イン・タマグ」（呪薬の印鑑）、また生薬などの煎じ湯と一緒に飲ませる補助薬（サイグ・イン・フルグ）、あるいは悪霊祓い儀礼を行う呪術治療など三つの分類からシャマニズム的「薬」を分析したい。

### (1) オンゴドのザサルガ「ongod・in・zasalga（治療）」

ブォの病気治療で“呪薬”として与える「サイグ（sayig）」には呪力が込められており、病気治療する機能を持っていると信じられている。モンゴル語の sayig はチベット語の za yig に由来する護符を意味する宗教的用語である。Sayig は便箋のような大小さまざまな黄色や白色の紙や布の上にチベット語、漢語およびモンゴル語の呪文を書いたものである。または、シャマンが仏教の開眼供養をするため呪文をつけた布切れ、あるいは、シャマンが超自然的な力を付与したとされる同じ形に切った布を指す。内モンゴルでは、sayig はシャマンや占い師が治療を行うときによく使う「処方」であり、その服用法は、サイグを燃やした灰にお酒や牛乳、砂糖などを em・in・hulug「補助薬」として加えて飲むというものである。そうすると、患者の心身に取り憑いた悪魔が調伏され、病気や災難から依頼者を守ってくれると信じられている。この用語はシャマニズムと仏教のシンクレティズムを表していることは明らかである。要するに、サイグには、呪文の力があるほか、ブォの守護霊の力が凝縮されている。同性のオンゴドに憑いている印鑑や呪文が刻まれた印鑑を紙や布に押し付けて付与するともある。それをオンゴドのサイグ「ongod in sayig（呪薬）」と総称し、オンゴドの霊的な力で治療を行っているため、本論では「オンゴドのザサルガ」と述べることにする。

モンゴル国の学者オ・プルブは、「シャマニズムの内なる性質は、ブォと交流する「オンゴド」に関する問題で、この問題を検討して究明することによって、シャマニズムの核心へ進む時期が迎えられる。すなわち、「オンゴド」とはいったい何者かを明らかにすることによって、ブォの世界観に関する主な問題が解決される」[オ・プルブ 2006：150] と指摘しており、「オンゴド」がモンゴル・シャマニズムにとって本質に迫る重要な存在であることを伝えている。そのため、オンゴドへの理解を深めるには、守護霊の語りは重要であると考えられる。

#### ① オンゴドの概念

「オンゴン」と「オンゴド」の語源は「オンゴ」で、「オンゴン」は単数形、「オンゴド」は複数形である。それぞれ意味合いが異なる点があるが、根幹をなす意味は同じである。ホルチン地域では、上述したように、「オンゴン」という語は、「精霊」という意味を持つほか、「墓」を意味するし、「オンゴド」とは「たくさんの墓」の意である。そのほかに、ブォの守護霊・補助霊を「オンゴド・テングリ」と言い、形態化されたものとされないものがある。いわば、依代である。したがって、オンゴドとは、目に見えない精霊たちと形態化された神像を指す。けれども、こちらで最も重要なのは、「霊的な力」を意味していることではないかと考える。

「オンゴの意味は『命、魂』と同じ意味を持っている」[ワ・サインチョット 1998：935]。「オンゴは本来、汚れなき、清らかなものという意味を持ち、シャマニズムの世界において、霊魂や霊的な存在に対する隠語として用いられる」[島村 2000：90]。モンゴルのシャマニズムで、「オンゴン」という言葉の意味は、文化人類学で言う「精霊」を意味し、「天神、地霊、祖霊、神霊、守護霊、補助霊」などを指し、オンゴンという語は、霊界の力を意味する言葉として捉えてよいだろう」[サラングワ 2019：123] と指摘している。

また、ホルチン地域のオンゴド信仰を見れば、「聖なるもの、神聖的」、「自然のまま、神様が宿っている」という意味を持ち、すなわち、「聖なるもの、神聖的」というのは、「オンゴン・バイガリ（聖なる自然）」、「オンゴン・モド（木）」とは、「精霊に捧げた木、主が宿っている、神聖的な木」という意味である。とはいえ、フルレシャの研究では、オンゴ、オンゴン、オンゴドとは「『激烈で、威力があり、恐ろしく、神聖である』という意を含」[フルレシャ他 1998：417] むと主張している。以上の先行研究をまとめてみると、オンゴドという言葉の意味は、霊魂的な存在と霊魂信仰を含んでいると考える。

そして、本論では、2021年11月から2022年2月にかけて行ったフィールドワークをもとに、主に銅製のオンゴド（神像）は、どのように霊力を持つようになっていくか、つまり、シャマンの病氣治療の時、「オンゴド・イン・サイグ（巫薬、呪薬）」として機能していくかという疑問を持ちながら解釈していきたい。

## ② オンゴド・ギ・ブトオゲフ「ongod gi butugehu（オンゴドの作り）」

ホルチン地域では、ブォの守護霊・補助霊を「オンゴド・テングリ」といい、形態化されたものとされないものがある。いわば、精霊たちの依代（神像）である。オンゴドは、人間や動物の形をしたもので、20 cm くらいのものから 1 cm にも満たない小さいものもあり、ほとんどが頭部か背中に紐を通せる穴がある。その穴に赤い糸を通して、糸をしめるとオンゴドが動けなくなると認識されている。また、オンゴドを動かすことは、シャマンの能力による。オンゴドを動かさないシャマンもいて、他のシャマンの持っているオンゴドを自分のものにもできるシャマンもいる。だから、霊力が強いオンゴドを持っているシャマンは、能力が高いといわれる。さらに、ブォが自分の持っているオンゴドを大切にしないと、オンゴドは逃げていくこともあれば、ブォに災いをもたらすこともあると考えられていて、ブォは自分の所有するオンゴドに供犠を捧げる儀礼を行う。したがって、オンゴドとは、目に見えない精霊たちと形象化された神像を指す。オンゴドは、材質的に金石、木、骨、フェルトや布で、先祖の像、家畜の神など神々の像を作って、祭っていたが、現在のホルチン地域の場合は、ほとんどが青銅製か鉄製で、その中でも青銅製が圧倒的に多く、外形から見ても古い時代のものに見える。ここで述べた青銅製か鉄製のオンゴドは、なぜ霊力を持つようになったのか。次に「ブトオルゲン・ネ・ウヒン・オンゴド（butugelgen・uhin・ongod）」について説明しよう。「ブトオルゲン」とは「出来上がり、完成、作り物、作る」などの意味があり、「ウヒン」は「娘、女性、特に未婚の女性」を指す。ホルチン地域では、「18歳で亡くなった少女の魂は霊力が高いと信じられている。シャマンは秘密の特殊方法で、その亡くなった18歳の少女の魂をあるものに入れて、封じ込めたら、オンゴドとして使用することができると思われる。亡くなった少女を土葬した場



合、亡くなった三日以内に、シャマンが麻の茎を切り取って、ある部分で人形の形にして、オンゴドとして使用する。また、亡くなった少女を野葬にした場合は、死亡から三日以内に、深夜死体の傍らで秘密の行事をシャマンが行った後、その死体の脛骨の骨を切り取り、人形の形にして、オンゴドとして使用する。どちらにしても、その亡くなった少女の魂をオンゴドとして作り上げた人形の形にした麻の茎か、脛骨の骨に封じ込むことから、オンゴドとして使えるようになるということである」[ダルハン 2005: 108-109]。フィールドワークでも、「ブトオルゲン・ネ・ウヒン・オンゴド」の霊力を獲得する方法に関わる話が何回も聞き取れた。BHS ブォ（1947 生まれ、75 歳、老レイチンである。モンゴル・シャマンの一種。その息子は黒ブォである。ブォの行事と治療で活躍している。2019 年 8 月と 2021 年 12 月に 2 回ほど聞き取り調査を行った）の話によると、「少女の魂のオンゴドは霊力が最も高く、もしその霊力の助けをもらえたら、すべての悪霊を魔除けすることができる」といわれる。上述した内容からわかるのは、だから、その少女の霊魂を青銅で作った人形に封じ込めて、「ブトオルゲン・ネ・ウヒン・オンゴド」が出来上がり、すべての悪霊を魔除けすることができる信じられている。しかし、これは最も危険なので、現在のブォたちは一般的に実行していない。次に、現代でどのようにオンゴドに命を与えているかを見てみよう。

### ③ オンゴド・ギ・アミラホ「ongod gi amilaho（復活）」

現在のホルチン地域の場合は、オンゴドはほとんどが青銅製か鉄製で、その中でも青銅製が圧倒的に多く、外形から見ても年代物に見える。実際、先祖から伝承してきたもの以外に、患者や親戚、友人から受け継ぐケースがある。または仏具店や骨董業者の販売する年代物と新しく製造され販売されているものがある。そのため、新しく購入されたオンゴドに命を与える必要がある。いわば、オンゴド・ギ・アミラホ「ongod gi amilaho（復活）」という儀礼を行う。アミラホ「amilaho」とは、「復活、命を与える」という意味である。あるいは、青銅製のオンゴドに呪文を込めて、霊力が宿るようにすることを指す。次に BHS ブォのインタビューから説明する。

ホルチン地域では、銅製のオンゴドに命を与える、復活するという信仰があり、それは 2 種類の状況で行われる。一つは、新しく入手した銅製のオンゴドに命を与える。もう一つは、亡きブォの後継者が先代ブォの銅製のオンゴドを受け継ぐ際に行う。

#### a オンゴド・ギ・アミラホ「ongod gi amilaho（復活）」

ホルチン地域では、現在においてブォが新しく入手した銅製のオンゴドに命を与える営みについて考察する。モンゴル語で、「オンゴド・ギ・アミラホ（オンゴドに命を入れる、命を与える、魂を込める）」という意味である。仏具の店や骨董業者から購入した青銅製の人形の神像の「オンゴド」に呪文を込めて、魂あるいは霊力を持つことである。そうでないと普通の青銅、鉄と違いがない。

シトゲン（守護神）に供える供儀として、生きた羊を丸ごと捧げる。まず、ブォは太鼓をたたき、呪文を心念し、生贄を清める必要がある。したがって、神歌を歌いながら、羊の姿から体の各部位（器官）を、一つ残らず順次、褒め称える。この過程で、呪文の力でどのような獐猛な生贄でもおとなしくなっていくといわれる。次に、屠殺する方法に注目していきたい。それは、伝統的な「ウルチレフ（uruqilehu）」方法である。祭祀において、屠手（施術者）は羊の腹部を天に向けナイフで拳が

入る大きさに切開し、右手を穴に入れて「荒い息をしているところ、熱いうち、心臓の底に「オンゴド（神像）」を入れる」。右手の中指で心臓付近の動脈を切断する。その瞬間、羊の全身の血は心臓付近に集まり、オンゴドを血の中に沈める。その後、血まみれのオンゴドを拭き清めることもしないまま高い場所（人の手が届かない場所）に置いて一夜が過ぎると、次の日に洗い出す。最後に、「オンゴド（神像）」を太鼓の凹みに入れて、一週間程度、呪文を心念し、毎晩40分ほど太鼓をたたく。終わったら、オンゴドを白米の中に差し入れておく。もし、次の朝、オンゴドが白米から跳び上がってきたら、「オンゴド」に命を与えることに成功したことを意味する。実は、守護神に捧げた後の生贄は俗から神聖的な意味で扱われ、「動脈を切る際、生贄の最後の息を「オンゴド（神像）」に閉じ込めたし、さらに、呪文を心念しながら、太鼓をたたいていることは、「オンゴド」に呪文を込めた」と理解できるだろう。そして、青銅製の人形の神像の「オンゴド」は、霊力を持つ、生き生きした「オンゴド」になると考える。

#### b オンゴド・セルゲフ「ongod sergehu（復活）」

ここでは、「オンゴド・セルゲフ（オンゴドを復活する）」とは、亡きブォの後継者が先代ブォの銅製のオンゴドを受け継ぐことである。すなわち、先代ブォが死に、後継者を選び、新ブォが誕生した後、先代ブォのジルヘン・オンゴド<sup>(1)</sup>を続けて用いる際、蘇生させる儀礼を行う。または復活の意味がある。実は「オンゴド・ギ・アマラホ」と同じ意味で扱われている。したがって、ブォの心臓を守るのに、中心的な機能を果たすオンゴドである。形としては銅製のオンゴドの中では、最も小さなものである。「ジルヘン・オンゴドについて月亮ブォは次のように理解している。ジルヘン・オンゴドは、言い伝えによると、「ブォが亡くなる直前に自分のジルヘン・オンゴドを飲み込むと心臓に付着する。食道を通り過ぎて、心臓に到着するのは霊的な力（オビドス）である。後継者あるいは勇気がある人に頼んで、亡くなったブォに対する葬法である「surleh（スルレフ）」<sup>(2)</sup>の儀礼を行う。それは、ブォが生前使った剣で胸を切開して、心臓に付着しているジルヘン・オンゴドを取り出す。後継者があらわれるとこのジルヘン・オンゴドを含め先代ブォの神具をも祭祀する。先代ブォの霊が後継者に憑依すると非常に霊験あらたかだと言われている」[サランゴワ 2015:33]。もしくは、ジルヘン・オンゴドを飲み込んだブォを埋葬すると、ブォの胸を破って墓から出てきて後継者を探す。そして、後継者を選び出し、後継者に憑くとそのブォの能力は強く、感覚が鋭いといわれる。以上のように、きちんと命を与えたジルヘン・オンゴドをブォはどこへでも派遣することができる。聞き取り調査でのハス・ブォの話によると、「昔の霊力があるオンゴドは白米に刺すと沈み、また火の玉を発して跳び上がってくる。さらに、病気治療の時助けになる」とのことである。しかし、現在の銅製のオンゴドはそれほど力が強くなかったけれど、病気治療の時、「オンゴド・イン・サイグ（巫薬、呪薬）」としてよく機能している。

#### ④ オンゴドのサイグ「ongod in sayig（呪薬）」

ブォの病気治療で薬として与えるサイグ（呪薬）に呪文の力が入っており、病気治療する機能を持っていると信仰されている。同じ呪文でも、守護霊の力が強いブォが処方すると強い治療力を発揮する。要するに、サイグには、呪文の力があるほか、ブォの守護霊の力が凝縮されている。同性のオン

ゴドに憑いている印鑑や呪文が刻まれた印鑑を紙や布に押し付けて付与することもある。それを「サイグ・イン・タマグ」(呪薬の印鑑)と総称する。ホルチン地域のブォの中に、呪文を布や紙に書き、その上に息を吹きかけて病者に与え、生薬を含めた補助薬(サイグ・イン・フルグ)<sup>(3)</sup>などの煎じ湯と一緒に飲ませることがよく見られる。事例考察の前に、治療者 QYL ブォについて簡単に紹介する。QYL ブォは 1948 年生まれ、74 歳の老ブォであり、自治区レベルのブォ踊りの伝承者である。中国内モンゴル自治区において、ブォ踊りに関する非物質文化遺産者は合計 3 人いて、その中の一人であると主張する。QYL ブォは若い頃から 10 年ほどの間病気に苦しんで、最後にシャマンの道を歩いた。今でも弟子入りと病気治療に活躍している。次に治療行為の事例から考察したい。

【事例 1】 チムゲ、女性、1984 年生まれ、ホルチン左翼中旗 A 村に在住、QYL ブォに新たに弟子入りした人である。今回の病気治療は成巫前の段階である。チムゲの話では、「10 年ほど、家庭の事業不振、疾病に付き纏われ、近代医学と制度的伝統医学(例えば、モンゴル医学)いずれの側からも、原因不明で、適切な診断と投薬は不可能となっているのである。自分の感覚では、幻覚があり、頭痛、体に震えがあり不安であるなど心身不調で、長年にわたり心身ともに苦しんできた」という症状がある。QYL ブォにこれは巫病と診断され、最初はチムゲの苦しみを除くため「サイグ(呪薬)」を与える。本稿では、オンゴドのサイグを主に考察するため、巫病の治療過程を省略する。次にチムゲの「オンゴドのサイグ(呪薬)」について述べる。

「オンゴドのサイグ(呪薬)」の製作過程：

第一に、新しい白い綿布や紙に、オンゴドに憑いている印鑑や呪文が刻まれた印鑑を紙や布に押す[写真 1]。



写真 1 オンゴドのサイグ



写真 2 サイグに呪文を吹きかける様子

第二に、治療者ブォは「サイグ・イン・タマグ」(呪薬の印鑑)を押した綿布や紙を手を持ちながら、口内では呪文を念じ、お酒をその上に吹きかけたサイグを 14 枚チムゲに与えた。これは、オンゴドのサイグ(呪薬)に治療者の呪文を込められていると考えられる[写真 2]。

第三に、呪文を込めたサイグに、点火した線香を使い、護符を書き込む。(こちらでは、サイグの上に直接書かず、いわば、隙間を開けて、空で字を書いた[写真 3]。目では見えない)。

第四に、「サイグ・イン・フルグ」<sup>(3)</sup>(呪術の乗り物、補助薬)を作る。その中では、「①七つの黒豆、②5種の穀物(黍、粟、稻、麦、菽)、③七つのハリネズミの棘、④乾かした兎の心臓、⑤(五台山仏母洞)五台山寺院から持ってきた(白色と赤色)土、⑥グルグム花(紅花)<sup>(4)</sup>の種、⑦古銭、⑧



写真3 線香で呪文を書く



写真4 サイグ・イン・フルグ

三つの大蒜、⑨センデン・モド<sup>(5)</sup>の枝（文冠果）など」から出来上がる〔写真4〕。

その飲み方は、まず「フル・ウゲイ・オス（hul・ugei・oso）<sup>(6)</sup>」とサイグ・イン・フルグ（補助薬）を鍋に入れて茹でる。その後、ウサギの心臓を食べて、古銭を赤い紐に通して首にかける。最後に茹でた湯を保存し、もらった14枚のサイグを7日間、1日朝と夜2回に分け、サイグを燃やした灰と茹でた湯を一緒に飲むものである。

前掲のように、ブォの話によると、一つのシトゲン<sup>(7)</sup>に360種類のアダ<sup>(8)</sup>が憑いている。いわば、一つのブォが降りてくると、360種類もの悪霊が憑いているため、それらの悪霊がフルグを苦しめる。サイグは患者の心身に取り憑いた悪霊を調伏し、病気や災難から守る護身符の役割を果たす文化的象徴になっており、また、薬草などを入れた「サイグ・イン・フルグ」（補助薬）はある程度実地的な医療効果があると考えられる。さらに、補助薬で使う黒豆と古銭は厄除けの機能を持つと信じられ、古銭を首にかけるのは患者を守る護身符のようなものと信じられている。そして、サイグとフルグ（補助薬）が一緒になって治療効能を発揮する。

## (2) 「エベスン・エム・ネ・ザサルガ (ebeson・em・in・zasalga)」

「エベスン・エム・ネ・ザサルガ (ebeson・em・in・zasalga)」とは、ブォが「エベスン・エム」薬草生薬を利用して“薬”を作り、患者の病気を治療することである。以下に出産、母子保健に関する専門治療と心身を清めるアルシャーン・オガールガ〔薬浴〕を事例として考察したい。

### ① 「ネレイド・イン・ザサルガ (Niraid・in・zasalga)」

モンゴル語の語彙から見ると、「ネレイ (Nirai)」は「赤ちゃん」で、「ネレイラフ (Ninailahu)」は「出産する」という意味を表す。そのため、「ネレイド・イン・ザサルガ (Niraid・in・zasalga)」とは、「オドガン (Odogan)、イトガン (Itogan)」(女性ブォ) または「デムチ・ブォ (Demchi・bo)」(産婆) が、主に出産、母子保健に関する専門治療を行う医術行為を指す。次にオドガンの治療行為を見よう。

「フレイ旗のある村でアリマというオドガンがいた。彼女は赤ん坊を取り上げるとき、まずは浄化呪術を行う。火鉢の中の火を外へ撒く或いは火で浄化仕上げのオンドル用の箒を使い、妊婦にとり憑いているアダを追い払うことである。この村にもう一人のグイレス・オドガンの話によると、毎回難

産中の患者がいるとき、彼女は妊婦を屋内のあるすべてのキャビネット、器皿容器の蓋を開け、窓も開き、火鉢に火を点けて煙でお部屋を浄化する。同時に、厳しい声で「なんのため付き纏っているか、債務があれば、キャビネットから持って帰るぞ、返債するなら戸や窓も空いているため置いて帰るぞ」と言って、難産中の患者の身にとり憑いているアダを厄除けする。そのほか、フレイ旗ではハイタン・オドガンがいた。彼女は胎位不正とかを矯正する手法を持ち、安全に分娩される医術を把握している。さらにハイタン・オドガンは「タヒヤン・セチゲ・チチゲ (Tahiyān · seqig · checheg)<sup>(9)</sup>」、<sup>(10)</sup>「バラス・オン・スウル・エベス (baras · on · segul · ebesu)」、<sup>(11)</sup>「ジェルゲン (jegergen)」、「グルグム花」などの薬草を使って“薬”を作り、妊婦が分娩するとき大出血になる場合、この“薬”で治療する。そして、当地の人々は「ホビルガン・オドガン (Hobilgan · odogan)」或いは神となるオドガンと呼ばれる」[フルレシャ他 1998: 473-474]。

このようなシャマニズムの治療行為は、象徴的なパフォーマンスを通して、患者の緊張感を和らげ、安心感をもたらしている。また、呪術的な儀礼で、患者を苦しめているアダを追い払うことで、ブォの治療効果に対する信頼感を高めることである。さらに、シャマンが治療経験を経て、一定の医療知識を身につけたことがわかる。その妊婦が分娩時に大出血を起こした場合に用いる「タヒヤン・セチゲ・チチゲ (鶏冠花)」を見ると、ケイトウの花穂は、実際に止血の効能を持つ。だから、ブォの作った“薬”は身体的な疾患の治療に役立っていると考えられる。すなわち、シャマニズム治療行為とは、呪術的な治療と医術治療を取り合わせて治療を行うことがその特徴になっている。

## ② 「アルシャーン・オガールガ (Rasiyan ugiyalg)」という儀礼

### a 心身を清めるアルシャーン・オガールガ

「アルシャーン・オガールガ (Rasiyan ugiyalg)」という儀礼は、「フルンボイルのシャマニズムにおける精神治療の一つである。これは、主に依頼者の心身を穢したと見られる不幸や悪といったものを洗い流し、一年の健康、平安を依頼者にもたらすためにおこなう浄化儀礼である。Rasiyan はサンスクリット語に由来する「温泉、鉱泉」を意味する現代モンゴル語であるが、同時に「甘露；霊水；神水」をも意味する宗教的用語となっている」[サイジラホ 2015: 186]。Ugiyalga は名詞であり、日常的にも使われている「入浴、洗浄、洗濯」を意味する現代モンゴル語である。この語彙はシャマニズム的用語として、心身に取り憑いた汚れを聖水で浄化する洗礼儀礼のことを示す。あえて日本語で表現してみれば「甘露洗礼」となるだろうか。また、依頼者の体についた悪いものを清めるという点で、ホルチン地域のシャマンが行う「ヌール・ガル・アルシャールフ (nigor · gar · rasiyalahu)」<sup>(12)</sup>という儀礼があり、それは「風馬 (kei · mori)」が弱ったりした人間の体についた悪霊を追い払う行事である。以下、この浄化儀礼の流れと内容に注目し、それぞれ文化的に解釈したい。

### b アルシャーンの作り方

アルシャーン (甘露) の作り方はモンゴル伝統医学の温泉療養法で使われている「薬浴温泉」と類似しているところがある。例えば、モンゴル医学において温泉療法は天然温泉療法と人工温泉療法という二つに分類される。モンゴルの医学史を概観してみるとわかるように、内モンゴル地域だけでなくとも 15 箇所天然鉱泉が利用されたことがあり、当時の僧医が鉱泉の成分、薬力源 (薬の性

質)、味、効能(薬効)、適応症、使用方法、療養方法などに合わせ、頭痛、眼病、皮膚病、関節の痛みなどの病気を治療していた。また人工温泉あるいは人工薬浴が当時の僧医によって作られ、適応性に合わせて、薬の種類と量を調整したりして、治療に用いていたという。例えば、その人工温泉は5種のアルシャーン「5種鉱泉 (tabun・rasiyan)」と命名され、5種類の薬草を入れて薬浴のように使われていた [ジゲメド 1984: 141-142]。近代におけるモンゴル伝統医学の薬浴に使われている薬草はジャクシン(イブキ「刺柏」Arca)の葉(杜松「ネズ(ネズミサシ)」を干した葉)、アザレア(中国産ツツジの一種、杜鵑葉)、タカヨモギ(「ハイイロヨモギ」、小白蒿や艾蒿、Agi)、シダレイトスギの枝(中国産ヒノキ科植物、水柏枝)、マオウ科の草(麻黄、Jegergene)などである [デレゲル 2005: 83] が、もともと人工薬浴を作るためには刺柏、麻黄、小白蒿、冬青(「モチノキ科のナミノキ」、Sorgar)、河柏(中国産ヒノキ科植物、Ombu)などが使われていたようである [ジゲメド 1984: 145]。

しかし、シャマンの洗礼用「甘露」の成分は、こうした伝統医学におけるアルシャーン治療と大きく異なっている。その作り方は、「まず rasiyan 石と見なされる 9 個の石、シャマンの法服につける 9 個の銅鏡を鍋に入れてゆでる。あるいはお酒、牛乳、バター、[ガンガ・エベス (gangga・<sup>(13)</sup>ebesu)]、水、さらにシャマン用銅鏡と一緒に鍋に入れてゆでることもある。この順番で作った rasiyan と銅鏡は各種の皮膚病に効くとシャマンたちは指摘し、特に沸騰している rasiyan の中から取ったばかりの銅鏡は皮膚病の治療によく効くと彼らは強調する」[サイジラホ 2015: 188]。このアルシャーンについてサイジラホは、シャマンが法服につける銅鏡は悪霊の攻撃やほかのシャマンの呪いを防ぐための道具としている。よって、洗礼「甘露」の中に銅鏡を入れるのは、患者を悪霊などから守る護身符の役割を果たす文化的象徴になっている。また、特定の石や草を入れてゆでることにはある程度の実験的な医療効果がある。さらに、シャマンのこういった行為の背後には伝統的医療の存在があって、「甘露」に入れる成分にはシャマニズム的意味の世界の霊的存在が象徴されており、シャマニズム的信仰と在来の知性がこの「甘露」に反映されていると指摘している。

そのほか、フルレシャの著作での CB ブォの話によると、ホルチン地域のフレイ旗ではアルシャーン・オガールガは次のようである。「浴槽の中に水を入れ、四十九日間「ウラガナ (Ulagana)<sup>(14)</sup>」の根を水に浸ける。この「薬草の水」は冷え性を治せる。治療方法は、正午時、子供をアルシャーンに入浴させ、母親はとなりで数を 100 まで、振り替えて数える。ずっと数えて、子供の体が震えるか汗が出たら止める。このように、49 日間続けてアルシャーンに入れれば子供の病気が治る」[フルレシャ他 1998: 477]。以上からわかるのは、フルンボイルのアルシャーンと同じく、伝統的医療の存在のもとで作られているということである。正午時に入浴することは、「端午の「午時の水」は霊験的な「薬力」があると信じられている」[周星 2014: 126] と似ているだろう。

c 「ヌール・ガル・アルシャールフ (nigor・gar・rasiyalahu)」

ホルチン地域のシャマンが行う「ヌール・ガル・アルシャールフ (nigor・gar・rasiyalahu)」という儀礼とは、もう一つの言い方が「風馬を浮かばせる (kei・mori・degdegehu)」儀礼という。「ヌール・ガル (nigor・gar/nuur・gar)」を直訳すれば「顔と手」で、実は人間の体に取り憑いた悪いもの(悪霊や怨霊)を清めることで、人間の運気を良くさせる儀礼である。治療対象としては、主に

「風馬 (kei・mori)」が弱った人間や歩き始めたばかりの赤ちゃんを中心に儀礼を行う。ただ、依頼者はひどい病気を患っている様子が特になく、最近、調子があまりよくない、元気が出せないあるいはだるいと訴える程度であったが、「これから精気にあふれ、元気で幸せ、健康で、無事で過ごしていけるように願い」風馬を浮かばせる儀礼を行う。これもホッパールの指摘したように「……これらのシャマンは直接病気を治療するのではなく、すなわち、一所懸命精力を集め疾病を防ぐことである」[ホッパール 2001:73]。「ヌール・ガル・アルシャールフ」はそのものが病気を予防する儀礼である。次に BHS ブォの行う儀礼から見てみよう。

### 【事例2】

まずは、写真5のように依頼者の首・親指・足の親指5点を白糸と黒糸でつなげて結ぶ。重要なのは首から線を引いて手と足の親指につなぎ、最後に手の親指の間に結び目を作り、一か所で7回結びつけることである。

次に、BHS ブォは依頼者の頭頂に呪文を込めたお酒を吹きつける。続けて、呪文を念じながら、依頼者の全身に白米をぶつける。それから、線香に点火し、煙で患者の体を浄化する。また、患者の頭骨から手と足の骨格をナイフで押す。最後にそのナイフで白糸と黒糸を1cmまで切り、顔を洗うよう準備していた盆に水を入れ、その中に入れる。これも「チャルマ・オゴトルホ (Chalma・ogdolho)」あるいはローブを切ることである。

最後に、切った白糸と黒糸を入れた盆の水に、ブォは線香の灰と白米を入れて、依頼者の顔、手、足を洗わせ、焼き紙（死者があので使える紙）で顔を拭き、水の中に入れる。また、熟成したご飯を少し入れる。その後に、助手ブォが盆に載せたもの [写真6] を持ってドアから外へ出て、悪い方角へ100歩進んだところに捨てて戻る。儀礼を行なっているブォはドアの所でずっと呪文を念じ、外に向かって米を投げつけ、助手ブォが家に戻るまで儀礼を続ける。これは助手ブォに悪いものが憑いて戻ること防ぐことと、そのブォの健康のためだといわれる。

### 【考察】

前掲のように、線香で清めたナイフで体を軽くたたくのは、悪霊を調伏するためである。お酒を吹きつけることは、ブォが治療するときよく見られる技術である。ブォは骨接ぎの治療を



写真5 チャルマ・オゴトルホ



写真6 悪いものを清めた水

行う際、患者の骨折（脱臼）部位に吹き付けることで感染を防ぎ炎症をやわらげ、血行をよくし痛みを軽減する機能があるという見方が普遍的である。サイジラホは、「酒はこういった物質的な機能以外に、治療を順調に進めるための文化的な機能を持っている」[サイジラホ 2015：234] と指摘している。さらに、ホルチン地域の文化では、患者と治療者の役割関係——自らの技と治療効果に対する治療者の自信と、治療者に対する依頼者の信頼——が築かれることにより治療が順調に実施される。これは、レヴィ＝ストロースが指摘したような依頼者、治療者、および両者を作り出した集団的世論の信頼と要求 [レヴィ＝ストロース 1972 (1958)：183-256] の三つによって成り立つ役割関係が想起されるが、ホルチンの場合、治療者に対する依頼者の信頼感を高めるための媒介者として、呪文を込めた酒が介在することにより、治療者<sup>ブォ</sup>の超自然的な力を患者へ伝達し、体に取り憑いた悪いもの（悪霊や怨霊）を祓うことができると解釈できる。そして、結びつけた白糸と黒糸を切るのは、病因になっている人間の体に取り憑いた悪いもの、依頼者の魂をコントロールしている悪霊や怨霊を追い払い、呪文を念じながら白米で依頼者の全身を打ちかけるのは、悪霊を調伏させていると理解できよう。このように、体に取り憑いた悪いものを清めることで、風馬を浮かばせることができ、幸運になることを象徴していると考えられる。

### (3) 「グリム・ザサルガ (gurim・zasalga)」

「グリム (gurim)」はチベット語の「ガルム」から由来する。チベットの「ガルム」はラマ教における「厄払い、福を招く」、「悪を除く、善を招く」、「魔除け」など法術の総称である [烏仁其其格 2006：76]。ホルチン地域では、人間（患者）の身代わりを捨てる、あるいは燃やすなどの悪霊祓



写真7 ジョリグ

い儀礼を行う呪術治療である。ホルチン・シャマンは患者の病因や病気の重さにより、「グリム」を行う。例えば、患者が死ぬほどの病気に罹<sup>かか</sup>った場合、「ジョリグ・ガルガホ・グリム (jolic・gargaho・gurim)」という呪術儀礼を行う。「ジョリグ (jolic)」とは亡霊、幽霊などを含む鬼を意味したヒトガタを指すモンゴル語であり、悪霊のようなものが人間に憑いたと見られたとき、その憑きものを被害者の体から分離させるためにシャマンが人間と同じ形にもものを作り、人間（患者）の身代わりとして捨てる。あるいはそのヒトガタを燃やすのである。HSO ブォ（1957 生まれ、ブォの道はわりと遅くから始まった。49 歳のころ急に倒れて、病気は原因不明で、その後ブォの道を歩き始めた。このブォの弟子ブォは何百人いるといわれる）の聞き取り調査によると、そのヒトガタ [写真7] は紙や草や柳で作られ、名前も患者の名前で呼び、ジョリグの頭を新しい白い布で覆う。シャマンはその白い布の上にジョリグの「目、鼻、口」を呪文で書き出す。もしそのような能力がなければ、呪文を念



じながら線香で描くこと。

また、患者の好きな服を着せ、一番重要なのはヒトガタに患者の汗や舌から取った血を塗り、それを「ジョリグ・アマラホ (jolic・amilaho)」、「ジョリグに命をふきこむ」といい、その後燃やすか、人がよく通る十字路に持って行ってばらばらにして捨てるのである。ホルチン地域のシャマニズム用語である jolic は「交換」するという意味を持っている。「おそらく人間に憑いたと見られる怨霊を患者から切り離すことで、患者の魂を取り戻すということから、「交換」jolihu や solihu の意味を持つようになったであろう」[サイジラホ 2015: 156]。筆者から見ると、人間に憑いたと見られる怨霊を患者から切り離して、患者の身代わりとするジョリグの上に移動させて燃やすことにより、呪術治療を行なっている。プォの話では、「ジョリグ・ガルガホ・グリム」は命に関わっている呪術治療なので、簡単に行わないという。もしプォの能力が足りなかったら、自分の命にも危険があるといわれる。次に BRB プォのジョリグより小さな儀礼である「ベリン・ゲゲフ・グリム (baling・gegehu・gurim)」を考察してみよう。

### 【事例 3】

BRB プォ (66 歳、1956 年生まれ) の患者は実は息子の妻の金蘭だった。金蘭は 30 代 (33 歳、1989 年生まれ) で、長年病気が治らない、病院に行っても原因不明と診断された。また、BRB プォの弟子でもあった。BRB プォによると、金蘭の身体に「ユムマ・ナガルドホ (yagoma・nagaldoho)<sup>(15)</sup>」や「ネリン・ウスタイ・ユム・ナガルドホ (narin・usutai・yagoma・nagaldoho)」、いわば「キツネ、イタチ」などが憑いているといわれる。そのため「ベリン・ゲゲフ・グリム (baling・gegehu・gurim)」という悪霊祓い儀礼を行なった。「ベリン (baling)」とは、小麦粉、蕎麦粉、トウモロコシの粉で、ジョリグと同じく亡霊、幽霊などを含む鬼を意味したヒトガタを指す。そしてそのヒトガタを捨てる呪術儀礼である。治療儀礼の過程は以下の通りである。

第一段階は治療儀礼の準備である。BRB プォは弟子たちと一緒にベリン (baling) を作る。今回使ったのは、トウモロコシの粉で、ベリンを人間と同じくイスン・スベ (目・耳・鼻・口) をそれぞれ作り出し、目は黒豆で作った。プォの話によると、黒豆は悪霊を調伏する力がある。ベリンの中で、金蘭の体に憑いている「ネリン・ウスタイ・ユム」である狐も作った。その後、「イルガ (ilga)」は魔除け、お守りの切り紙である。それは五つの色で、それぞれの図案が違う。黄色のイルガ [写真 8] は仏教を象徴する。また、患者の名字は「白」で、プォの話では、患者により名字も違っていく。残りは、赤、緑、白、黒である。五色を使うのは、人間の体は「tabun・mahabod (五行)」から出来上がっていることを示すといわれる。

第二段階で守護神に祈る。治療者シャマンは、まず、法服を着る。次に家屋の中の祭壇や専用机の上にある線香と灯明に火をともし、祖霊へ捧げる酒を準備する。最後に、酒のつがれた杯を持って外へ出かけ、祖霊がい



写真 8 黄色のイルガ



写真9 出来上がったペリン



写真10 治療中の患者



写真11 イルガを入れたペリン

と思われる空へ酒をまく。<sup>(16)</sup>そして、祖霊が保護してくれることを祈る。

第三段階では悪霊祓いプロセスが始まる。患者金蘭は治療者シャマンのオンゴドにひざまずいて拝む。次に、患者は目を閉じ合掌しながらベッドに座ると、治療者シャマンは患者の体にお酒を吹き付ける。治療者シャマンはペリン [写真9] をドアのところに置き、白米を患者 [写真10] とペリン [写真9] にかける。これは患者の身体から悪霊を追い払う意味を持つ。次に、患者の頭にイルガの折り紙を被せる [写真10]。治療者シャマンと助手シャマンたちは、祖霊の入ってくるドアの方へ向かい、祖霊を誘う神歌は合唱の形で行われ、メロディーと太鼓のリズムに従い、踊る。

今回の治療においてブォは守護霊を憑依させておらず、ただ助けを祈って拝む。さらに写真10のように、ブォの神鞭「タショール (tasigor)」で患者を打ち、また、ブォの剣「セレメ (seleme)」でたたきながら威嚇する。このように、悪霊を調伏した後、患者金蘭は「フル・ウゲイ・オス」で、口をすすぎ、顔と足を洗う。それから、黄色イルガ [写真8] を「魔除け、護符」として寝るときまくらの下に置く。白いイルガで顔を拭き、その後ペリンの中に入れる。黒いイルガはドアの入り口で燃やす。最後に、イルガを入れたペリン [写真11] を家から100歩以上離れた、通行人の多い道や十字路で燃やす。捨てに行く人は、身を守るために必ず神具ブォの神鞭や剣を持っていく。しばらくたってから、玄関の外側に、捨てに行った人が戻ってくると、治療者ブォは体を清めるために呪文を念じ、お酒を吹きつけて、悪霊がついてこないように浄化する。これで悪霊祓い儀礼が終了する。

### Ⅲ シャマニズム的な薬をめぐる原因

ホルチン・シャマンの考えでは、「風馬 (kei・mori)」とは弱った人間の体に悪霊が取り憑くことである。例えば、精神異常、幻覚、原因不明である病気……などの症状が出る。シャマンが治療を行うときによく使う「処方」、シャマニズム的な「薬」は、「オンゴドのサイグ (呪薬)」を燃やした灰に生薬、お酒や牛乳、砂糖などを em・in・hulug「補助薬」として加えて飲むというものである。そうすると、患者の心身に取り憑いた悪魔が調伏され、病気や災難から依頼者を守ってくれると信じられている。ここでは、周星の指摘したように、「端午の「薬物」が具体的な病気に対して使うものではなく、「対症下薬 (対症に投与する処方薬)」の「薬」というよりは、むしろ宇宙運行の中から出現した「汚染」に対応するための、浄化の機能を有する「薬物」であることに因る。端午の「薬物」には多くの具体的な物質な形態が現れているが、その内には「陰陽二気」や「歳時天候」などの古代的な宇宙論に基づく抽象的な力量があることがわかる。これによって、端午の薬物は一種の「宇宙薬」

のブロックに基づいて不可思議な霊験があると思われる。いわゆる、「宇宙薬」とは天地宇宙の精華を凝縮、あるいは凝集したものである。また、「宇宙薬」はどのような形式や物体に変容しても、本質が変わらない……」[周星 2010: 17] という。以上のように、本論でのシャマニズム的“薬”も「宇宙薬」の一つの形式だといえよう。シャマニズム的“薬”は、オンゴド（守護霊）の超自然的な力や呪文を込めたサイグ（呪薬）の霊的な力が含まれていることがわかる。さらに、em・in・hulug「補助薬」として、実際的な薬用の価値があるもの「生薬」と現実では無用なもの、例えば「信仰的なもの、守護霊に捧げた線香の灰、「テングリのソモ（天の剣）」などが挙げられる。「テングリのソモ」とは、「モンゴル人の考えでは雷が鳴る時天から落ちてきたものとする」や「フル・ウゲイ・オス」は、実は地面に無着の水で、モンゴル人はこれを神聖な水であり、超自然的な力を持つと考える。さらに、アルシャーニ・オガールが「薬浴」に見えるシャマン用の銅鏡は悪霊の攻撃やほかのシャマンの呪いを防ぐためである。人間（患者）の身代わりを捨てる或いは燃やすなど、悪霊祓い儀礼でのバリンなどがある。つまり、シャマンの呪薬、生薬、道具、あるいは悪祓いを含むあらゆる「モノ」が、シャマニズム的な「薬」になり得るだろう。

## おわりに

本論文では、ブォの治療行為を三つに分けて考察を行った。第一に、ブォの病気治療で“呪薬”として「サイグ (Sayig)」を与える。サイグの実物は便箋のような大小さまざまな黄色や白色の紙や布の上にチベット語、漢語およびモンゴル語の呪文を書いたものである。現在のホルチンでは、オンゴド（守護霊、偶像）に憑いている印鑑や呪文が刻まれた印鑑を紙や布に押し付けて付与することもある。それをオンゴドのサイグ「ongod in sayig（呪薬）」と総称し、治療者ブォの超自然的な力を患者へ伝達し、体に取り憑いた悪いもの（悪霊や怨霊）を祓っている。第二に、「エベスン・エム・ネ・ザサルガ」とは、ブォが薬草「生薬」を利用して“薬”を作り、患者の病気を治療することで、出産、母子保健に関する専門治療と心身を清めるアルシャーニ・オガールが「薬浴」の事例を挙げて分析した。第三に、「グリム・ザサルガ」は、人間（患者）の身代わりを捨てる、あるいは燃やすなどで悪霊祓い儀礼を行う呪術治療を事例で考察した。

ホルチン地域の文化において、ブォはシャマニズム的治療行為を背景とする伝統的医療の存在のもとで、信仰治療者と民間治療者の役を演じている。信仰治療者として、宗教儀礼と治療過程を通して患者の心理に影響を与え、緊張感を和らげ、安心感をもたらすことにより、ブォの象徴的な治療効果を発揮している。さらに、シャマンが治療経験を経て、一定の医療知識を身につけ、伝承する役割を果たしている。

## 注

- (1) ジルヘン・オンゴドとは、直訳すれば、中心たる、心臓たるオンゴドで、銅できており、ブォの守護霊が憑依する神具である。新ブォの命を守護する内なるオンゴドである。
- (2) 亡くなったブォに対する葬法である「surleh（スルレフ）」とは、ブォが最後の息を引き取る直前、まだ虫の息のうちにその体を解体し、まず胸部を切開し、次に、四肢、頭、胴体を切断して、「ブォ・ネ・モ

- ド」(ブオの樹)の枝にかけておくことである。ホルチン地域では、多くのブオにとって望ましい葬儀だった。
- (3) 「フルグ (hulug)」の日本語による直訳は馬である。インタビューによると乗り物である。ホルチン・シャマニズムの中で、フルグは祖霊シャマンと人間の間の媒介者である、祖霊を憑依させた子孫シャマンを指している。ホルチン・シャマニズムの用語として「ウル・フルグ」がある。ここでは「サイグ・イン・フルグ」は(呪薬の乗り物、補助薬)という意味で扱う。
- (4) 「グルグム (gurgum)」花は、紅花である。紅花は生薬として血液の流れを良くし体を温め、冷えを改善する効果がある。また、血液をきれいにし、流れを良くする働きから血液の不調が原因の月経痛や月経異常に用いられている [セレンナムジル 2019: 381]。
- (5) 「センデン・モード (senden・modo)」は、野生樹だが、庭で栽培することもある。煎って、実を食べる。漢字で「文官果」、あるいは「文官果」と書く [セレンナムジル 2019: 221]。
- (6) 「フル・ウゲイ・オス (hul・ugei・oso)」は、日本語での直訳は足がないお水。実際には地面に無着の水、井戸から出したばかりのお水を指す。モンゴル人はこれを神聖なお水と考える。
- (7) 「シトゲン (situgen)」は信仰対象である祖霊、守護霊、および悪霊に憑く霊を指す。
- (8) 「アダ (ada)」は悪魔や悪霊を指し、人間に取り憑き、心身の病いをもたらすといわれる。
- (9) 「タヒヤン・セチゲ・チチゲ (Tahiyān・seqig・checheg)」は中国語で鶏冠花で、〈中薬〉である。ケイトウの花穂は、止血、止瀉剤に用いる [セレンナムジル 2019: 61]。
- (10) 「バラス・オン・スウル・エベス (baras・on・segul・ebesu)」は中国語では虎尾草で、〈漢方薬〉である。虎の尾の効能は、風邪、下痢、除湿……など。
- (11) 「ジェルゲン (jegergen)」は中国語で「麻黄」で、〈漢方薬〉である。中国北部、モンゴルの砂地に自生する、マオウ科は常緑低木。夏、卵形の花が咲く。茎を干したものが漢方のせき止め。中国では古くから麻黄は重要な治療薬として利用され、『神農本草経』にも発汗、平喘作用などが明記されている。モンゴル医薬では解熱、消炎、止血、抗腫瘍、発汗、外傷治療を促進する [セレンナムジル 2019: 24]。中国内モンゴルではよく薬浴用として使用される。
- (12) 「風馬 (kei・mori)」は、モンゴル語の Kei・mori で英語では wind horse と訳されている。風の馬はチベット仏教やボン教のルンタに由来し、空を飛ぶ馬を指す。人間が精気にあふれ、元気に幸せで、幸運な人生を送る意味を表す。モンゴル人のシャマニズムでもチベットと同じ意味を指している。
- (13) [ガンガ・エベス (gangga・ebesu)] は中国語の百里香、地椒 (水楊梅: ダイコンソウ)、日本語のタチジャコンソウ (ヒャクリコウ) を指す植物である。ガンガ・エベスは芳香を放つ多年生植物であり、金針状の幹は紫色で、卵形の葉が対をなして全体に並ぶ。花は頂部末端に集中し、がくは不均一で、上端は三つに裂け、下部はくぼんでいる [セレンナムジル 2019: 313]。冠状で長さ 40 mm の白、ピンク、また紫の花冠を持ち、種は小さくて堅い。モンゴル人はガンガ・エベスに火をつければ悪霊を防ぎ、すべてのものをその煙で清められると信じている。
- (14) 「ウラガナ (Ulagana)」は中国語の小李仁、欧李、郁李仁である。英語は「Chinese Dwarf Cherry Seed」。薬用部分は種仁。しかし、モンゴル人は薬草の根を薬浴に使っている [セレンナムジル 2019: 149]。
- (15) 「ユムマ・ナガルドホ (yagoma・nagaldoho)」とは、「ものがついた」という場合のモンゴル語で、肉眼で見えない超自然的な「もの」、いわゆる精霊が人間に憑いたという意味を示す。
- (16) 日本語の「空 (そら)」と「天神 (てんじん)」はモンゴル語で「tegri」と呼ばれる言葉によって表現されている。つまり、tegri は、シャマニズム的世界の中では空間性が強く、空 (天) であり、天神でもある。

## 参考文献

### 日本語文献（五十音順）

- ウノ・ハルヴァ（田中克彦訳）1971『シャマニズム——アルタイ系諸民族の世界像』三省堂
- エリアーデ・M（堀一郎訳）1974『シャマニズム——古代的エクスタシー技術』冬樹社
- クライマン・A（大橋英寿／遠山宜哉／作道信介／川村邦光訳）2021『臨床人類学——文化のなかの病者と治療者』河出書房新社
- 小長谷有紀 2013「チンギス・ハーン崇拝の近代的起源——日本とモンゴルの応答関係から——」『国立民族学博物館研究報告』37（4）
- サイジラホ 2015『内モンゴルにおけるシャマニズムと民俗治療』日貿出版社
- 佐々木宏幹 1984『シャーマニズムの人類学』弘文堂
- サラングワ 2015「内モンゴル・ホルチン地方のブォ（シャマン）の死後の世界」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』17: 31-46
- サラングワ 2019『ブォ・シャマニズムの現在——内モンゴル・ホルチン地方の新地平』牧歌舎
- 島村一平 2000「平原に聴く、シャマニズムの息吹」『季刊民族学』（93）：90-103、千里文化財団
- ダルハン 2005「祭祀儀礼から見るホルチンのボームリグル——東モンゴルのシャマニズム研究」一橋大学大学院言語社会研究科
- デレゲル 2005『モンゴル医学の世界』出帆新社
- 波平恵美子 1988「民間療法と近代医療」『からだの科学』（114）
- バンザロフ・D・ミハイロフスキ、ウエー・エム（白鳥庫吉、高橋勝之訳）1971『シャーマニズムの研究』新時代社
- レヴィ＝ストロース・クロード 荒川幾男他訳『構造人類学』1972（1958）みすず書房

### モンゴル語文献

- フルレシャ、白翠英、ナチン、ボヤンチョゴラ 1998『ホルチン・シャーマニズム研究』民族出版社
- フルレシャ 2015『フレイ・シャマニズムの史論』（庫倫薩滿教史論）内モンゴル文化出版社
- オ・プルブ 2006『モンゴル・シャマニズム』（蒙古薩滿教）民族出版社
- セレンナムジル 2019『内モンゴル植物モンゴル薬標準図鑑』内蒙古人民出版社
- ジゲメド 1984『モンゴル医学基礎理論』内蒙古人民出版社
- ク・サインチョット 1998『生命崇拜』（上・下）内蒙古人民出版社

### 中国語文献（ピンイン順）

- ホッパール 孟慧英訳 2001「薩滿的社会作用」『満州語研究』第一期 p. 73
- 周星 2014「端午節と宇宙薬」李松、張士閃主編『節日研究』第九輯、pp 107-138、泰山出版社
- 周星 2010「中国古代神話里的『宇宙薬』」『青海社会科学』第4期 p. 17
- 烏仁其其格「蒙古族薩滿医療的医療人類学解釈」中央民族大学博士学位論文 2006 p. 76

### 英文文献

- Rivers, W. H. R. 1999, c 1924 *Medicine, Magic and Religion: The Fitzpatrick Lectures delivered before the Royal College of Physicians of London in 1915 and 1916*, London: Routledge